1970年（昭和45） 39歳　『出雲の阿国』（中央公論社）が第20回芸術選奨文部大臣賞を受賞。和歌山県民文化会館の柿落としで「華岡青洲の妻」を公演。『かみながひめ』（ポプラ社）。戯曲集『ふるあめりかに袖はぬらさじ』（中央公論社）

1972年（昭和47） 41歳　『恍惚の人』（新潮社）がベストセラーとなる。「ふるあめりかに袖はぬらさじ」初演。

1974年（昭和49） 43歳　パリで有機農業国際会議に参加。「複合汚染」を朝日新聞に連載。

1975年（昭和50） 44歳　『複合汚染』上下巻（新潮社）がベストセラーとなる。ミュージカル「山彦ものがたり」を作・演出。

1978年（昭和53） 47歳　『和宮様御留』（講談社）がベストセラーとなる。

1979年（昭和54） 48歳　『和宮様御留』が第20回毎日芸術賞を受賞。取材のため各地の離島へ。

1981年（昭和56） 50歳　「華岡青洲の妻」が中国で公演。劇団に同行。

1982年（昭和57） 51歳　『開幕ベルは華やかに』（新潮社）

1984年（昭和59） 53歳　ウェールズ大学 日本学大会のゲスト講演のため、イギリスへ。8月30日、急性心不全のため、杉並の自宅で永眠。

和歌山市立有吉佐和子記念館

有吉佐和子記念館は、和歌山市出身の作家 有吉佐和子（1931～1984）が旺盛な創作活動を行い、ベストセラーのすべてを執筆した東京都杉並区の邸宅を、氏の心の中に流れる青く美しい紀の川のそばに移し、その生涯と馥郁たる内面世界にふれることができるよう復元した施設です。当館は、氏ゆかりの資料を展示するなど、郷土が生んだ有吉佐和子氏の業績を顕彰するとともに、市民の文化振興に資することを目的としています。

有吉佐和子記念館の整備にあたり、塚本治雄様の篤志により文化の振興を図り、本市を愛する心を育むことを目的とした事業として「和歌山市塚本治雄基金」を活用させていただきました。

令和4年6月　和歌山市

和歌山市立

有吉佐和子記念館

Wakayama City Ariyoshi Sawako Memorial Museum

開館時間　9:00～17:00
休 館 日　水曜日（祝日の場合は翌日）、年末年始（12月30日～1月3日）
入 館 料　無料
交通案内　［南海和歌山市駅からお越しの場合］
徒歩（約5分）

［JR和歌山駅からお越しになる場合］
●バスの場合
和歌山バス「南海和歌山市駅ゆき（約15分）」下車➡徒歩（約5分）
●電車の場合
「南海和歌山市駅ゆき（約10分）」下車➡徒歩（約5分）

駐 車 場　8台／ゆずりあい駐車場 1台
所 在 地　〒640-8204 和歌山市伝法橋南ノ丁9番地
ホームページ　https://www.ariyoshi-sawako.jp/
電　　話　TEL.073-488-9880

ホームページはこちらから

和歌山市立

有吉佐和子記念館

Wakayama City Ariyoshi Sawako Memorial Museum

有吉佐和子の生涯

1931年（昭和6）　1月20日和歌山市に生まれる。

1935年（昭和10） 4歳　母の実家（和歌山市）から東京へ転居。

1937年（昭和12） 6歳　銀行員の父の赴任によりジャワ（インドネシア）に一家で移り、現地の日本人小学校へ入学。

1939年（昭和14） 8歳　一時帰国し、木ノ本村立木本小学校（現和歌山市立木本小学校）へ通う。和歌山の青い川に感動。

1941年（昭和16） 10歳　日本に帰国。

1943年（昭和18） 12歳　東京の根岸小学校卒業。

1945年（昭和20） 14歳　疎開し、県立和歌山高等女学校（現・県立桐蔭高等学校）に通う。

1947年（昭和22） 16歳　東京の光塩高等女学校（現:光塩女子学院）に転入。在学中にカトリック受洗。

1948年（昭和23） 17歳　学制改革により都立第五女子新制高等学校（現:東京都立富士高等学校）に転入。

1952年（昭和27） 21歳　東京女子大学短期大学部英語科卒業。

1954年（昭和29） 23歳　「落陽の賦」（同人誌「白痴群」）発表。

1956年（昭和31） 25歳　「地唄」が「文学界」新人賞候補、芥川賞候補となる。

1957年（昭和32） 26歳　「白い扇」（「キング」）が直木賞候補となる。「石の庭」が第12回芸術祭テレビ部門奨励賞を受賞。『処女連禱』（三笠書房）。『まっしろけのけ』（文藝春秋新社）

1958年（昭和33） 27歳　新作浄瑠璃「ほむら」が第13回芸術祭文部大臣賞を受賞。

1959年（昭和34） 28歳　『紀ノ川』（中央公論社）。ニューヨークのサラ・ローレンス・カレッジに留学。

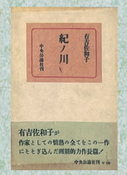
1960年（昭和35） 29歳　『私は忘れない』（中央公論社）

1963年（昭和38） 32歳　長女・玉青を出産。『香華』（中央公論社）が第1回婦人公論読者賞、第10回小説新潮賞を受賞。『助左衛門四代記』（文芸春秋新社）。『有田川』（講談社）。『連舞』（集英社）

1964年（昭和39） 33歳　『非色』（中央公論社）

1966年（昭和41） 35歳　『日高川』（文芸春秋新社）

1967年（昭和42） 36歳　『華岡青洲の妻』（新潮社）がベストセラーとなる。第6回女流文学賞を受賞。舞台化（脚本・演出）を手がける。『乱舞』（集英社）



紀ノ川
中央公論社 昭和34年6月
（書籍題字：幸田 文）

華岡青洲の妻
新潮社 昭和42年2月
（題簽：花崎采琰）

助左衛門四代記
文藝春秋新社 昭和38年9月
（装幀：町 春草）

母娘の思い出

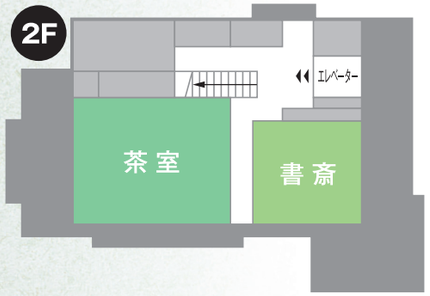
幼かった娘の玉青が、母の「ラブピースを貼って」のリクエストにより、使わない鍵穴を隠すために、当時流行っていたスマイルのシールを貼りました。

そのスマイルシールは今もなお当館のどこかに潜んで、来館者を笑顔にしてくれています。

ぜひ探してみてください。

【2階】書斎

この八畳の和室は執筆用の机とベッドが置かれ、仕事場兼寝室として使われていました。邸宅が建てられた1961年以降に書かれた『華岡青洲の妻』や『恍惚の人』・『複合汚染』・『和宮様御留』などの多くの作品は、この部屋で生まれました。実際に使用した机・椅子などを展示し、仕事場を再現しています。



【1階】展示室

この部屋は、洋間の応接室で、有吉佐和子が新たな作品を創るための出版社との打ち合わせや、記者の取材を受けるときなどに使われていました。

展示室では、紀州を舞台にした『紀ノ川』、作品にちなみ庭でも育てていた『芝桜』・『木瓜の花』など、有吉佐和子の名作に関する貴重な資料や、アメリカ・中国・ニューギニアなどしばしば海外に飛び出した有吉佐和子が各地で集めてきた資料などを展示しています。

【2階】茶室

有吉佐和子は三味線や鼓なども嗜んでいました。また、藪内流の茶道を学んだ茶人でもあり、多忙を極めた執筆活動の合間を縫って、「青庵」と名づけた自宅の茶室にて、しばしば茶会を催す風流人でした。畳には炉が切られ、茶事の準備をするための水屋も設けられています。

【庭】

蹲や水鉢などが配置された和風の庭となっています。

庭にはつつじをはじめ様々な草花が植えられていて、春に花を咲かせる芝桜や木瓜は、それぞれ『芝桜』(1970年)・『木瓜の花』(1973年)と小説のタイトルになっています。両作品は花街・花柳界で生きる正子と蔦代というふたりの女性を主人公に、前者は若い頃、後者は老境の頃が描かれています。

このように、庭はベストセラー作家・有吉佐和子の活動の源となっていました。

ライブ

朗読会

有吉佐和子記念館のカフェスペースでは
お茶やワッフル、茶粥定食をお楽しみいただけます
『純喫茶リエール －有吉佐和子邸－』